

女性の名前に込める次世代への願い



What's in a name?

やまだ ようへい
山田 洋平

東京外国語大学博士後期課程

モンゴル人の友達から「わたしに日本の名前を付けてよ」とせがまれることがある。わたし自身もモンゴル文化圏でモンゴル名を授けられることがあるので、「名前を付けたい」「付けられたい」気持ちはよくわかる。それでもモンゴル人はモンゴル人らしい名前を名乗ったほうが良いのではないかと考えてしまう。それはわたしのモンゴル文化を尊重する気持ちか、それともどこかにある排他的な気質か、名前を付けるということを重ね考えすぎなのか、よくわからない。「勇者」「花」などモンゴル人によく見る名前は、日本語に直訳するという方法もある。この方法がうまくいかない場合には、名前に願いを込めて、字画を考えて、響きを確認かめ、と「仕事になる。それとももっと気楽にひょいと名付けるべきなのだろうか。

モンゴルでは、魔を除ける意味合いから「名無し」「人でなし」のような名前を付ける習慣があるということが知られている。一瞬眉をひそめてしまうような名前だが、どんな名前にも込められた願いがあることを思うと奥が深い。「61」「70」といった数字を名前とするモンゴル人もいるが、これは彼が生まれたときの祖父の年齢なのだという。脈々と受け継がれてきたモンゴルの人びとの縦の繋がり^{つながり}を、こうした名付けに強く感じる。ダゴラという女性と出会ったのは、内モンゴル滞在中のことであった。日本への留学^{りゅうがく}を控えているということで、妹の伝手^{でんて}で数少ない日本人であるわたしを見付け出したのだという。彼女は笑い話として、パスポート

を取得したら姓名わけられてしまったというエピソードを教えてください。モンゴル人にも氏族名の類はあるが、わたしたちのいう苗字のようによく使うものではない。パスポート取得の際には漢人の習慣にしたがって姓名をしるす必要があるが、そこでひとつのはずの名前ノオンダゴラが、姓ノオン、名ダゴラと切られてしまったという話。わたしはこのとき初めて彼女の本名がノオンダゴラで、ダゴラというのは通称であるということを知った。

ノオンとは「男の子」の意、ダゴラは「連れて来る」という動詞の命令形だから「連れて来い」、つまり彼女の名前は「男の子を連れて来い」「次は男の子が付いてきますように」という願いが込められているのである。よくよく観察すると、内モンゴル地域では類例「息子」を連れて来い」「弟よ来い」「弟を招け」のような名前の女性とよく出会う。動詞の命令形が名前に入っているというのは、なんともストレートな、強い願いなんだなと感じさせる。ダゴラのように、「男の子」の意味の部分^{ぶぶん}を嫌って普段は通称を名乗っているというケースも多々ある。

女の子に勇ましい「鷹^{たか}」と付けたり、「息子」という語を加えたり、なんていう名前とも出会うことがある。「男の子だったら良かったのに」という否定的な名前と見ることもできるが、次なる世代への願いが込められた希望^{あゆ}溢れる名前ともとれる。名前に込める願いにもいろいろな形があるのだと改めて思っ。